

第 47 回和歌山県皮膚科医会学術講演会

第 1 回日臨皮和歌山県支部総会

常識を見直そう：汗とスキンケア

杏林大学医学部皮膚科 塩原哲夫

アトピー性皮膚炎(AD)において、汗は長らく悪化因子として考えられてきた。しかし、AD は皮膚の乾燥により特徴づけられる疾患であることを考えると、皮膚の水分を保つ因子として汗は重要な役割を担っているはずである。それがいままで無視されてきた背景には、医者、患者ともに、汗は悪化因子であるという常識にあまりに強く縛られすぎた点があげられる。しかも水分量の測定に関して、日常生活ではほとんどありえないような安静状態での測定値に固執しすぎていたこともその要因のひとつである。実際、AD 患者では温熱負荷に対する発汗反応は著明に低下している。汗は皮膚の乾燥を防ぎ皮膚温を保つだけでなく、病原菌に対する抗菌作用を有するペプチドを含んでおり、AD ではその量的低下により病原菌が定着している可能性が示唆されるようになってきた。現代人のライフスタイルは発汗機能を低下させ、AD をますます増加させている可能性がある。

一度悪玉のレッテルを貼られてしまうとそれを覆すのは至難のワザである。アトピー性皮膚炎(AD)における汗はまさにその好例といえる。どの教科書をみても汗は AD の増悪因子と書かれているし、小児の AD は汗のたまりやすい部位にできることを考えれば、それは当然のように思える。実際、AD の患者は汗をかくと痒くなると訴える。しかも、AD が重症になるほど、汗抗原に対する皮内反応が陽性になるとの報告もある。これだけの状況証拠がそろえば、裁判なら覆りようのない有罪判決を"汗"に与えることができるかもしれない。この覆りようもないと思えた"汗悪玉説"も、いまや"善玉説"にその座を脅かされつつあるのが現状である。現時点では意外に思われる方が多いかもしれないが、汗の機能をよく考えてみれば、この流れは当然のことに思われる。汗が AD の発症にどのように関与しているかについてデータを引用しつつ、どちらかといえば(!)"善玉説"の立場に立って話を進めていく。